

進路決定過程における学生の意識と行動： キャリアアドバイザーの役割と機能の考察

HATTORI, Noriko / 服部, 典子

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

233

(終了ページ / End Page)

250

(発行年 / Year)

2013-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008792>

進路決定過程における学生の意識と行動

—キャリアアドバイザーの役割と機能の考察—

法政大学キャリアデザイン学部 キャリアアドバイザー 服部 典子

はじめに

学生は、大学生活において、学業の研鑽はもちろんのこと、サークル活動やアルバイト、ボランティア、インターンシップなど様々な体験をしている。なかでも、卒業後の進路を決める体験は、進路選択に関わる動機づけと、迷いや悩みを乗り越える方法を学ぶことができる重要な体験でもある。アイデンティティ理論を提唱するエリクソンは、思春期から青年期の発達課題をアイデンティティの確立として、これからどう生きていくかを選択し、統合する時期としている。金井（2002）は20代の時期を、自分が何者であるかという思春期の問いから、自分の望みや抱負をどう実現するか、どのようにキャリアを深く掘り進むのがベストであるかを考える時期と述べている。すなわち、大学時代は、進路決定のプロセスにおいて、体験を重ねながら内的キャリア⁽¹⁾を開発する、重要な時期であると考ええる。

法政大学キャリアデザイン学部の学生の卒業後の進路⁽²⁾は、一般企業や公務員（教員を含む）への就職がほとんどであるが、卒業後に海外に留学することや、大学院進学をすることも選択肢として考える学生もいる。学生が何れの選択を決定するにしても、その進路決定過程において、第三者から何らかの支援を受けながら、自分の興味や関心のある分野と得意なことを見極め、進路を選択している。筆者はキャリアデザイン学部のキャリアアドバイザー⁽³⁾であり、学生の進路選択に関する相談を受ける機会がある。相談を受ける際に留意しているのは、学生が自らの思いや考えを本音で語ることができるような信頼関係

234 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

を築くこと、すなわちラポールを築くことである。学生がキャリアアドバイザーに就職活動の状況を語るうちに、「本当は憧れている仕事があるんです」、「実は人と接する仕事が好きなんです」など本音を言語化する。キャリアアドバイザーは、学生が本音として語った興味や関心、価値観や職業観を考慮し、学生の進路選択に役立つ支援を行う。進路選択が卒業後の人生設計にいかに重要であるかを、学生自身が理解し、自ら進路を選択することができるように支援する。一方、視点を変えると、学生は本当はどのような支援を必要と考えているのだろうか。学生を取り巻く環境や、時期や状況などに応じて、必要な支援は異なるのではないだろうか。進路選択の相談をする相手についても、その時々に応じた相談相手を選択していると推察する。また、進路選択に影響を受けるような出来事が起きた時、学生の意識や行動はどのように変化するのであろうか。このような筆者が学生の相談に応じるなかで抱いた関心から、本研究を行った。

1. 研究の目的

本研究の目的は、次の二点である。一点目は学生の進路決定過程において学生の進路選択に対する意識や行動の変化を検証することである。そのために、影響を受けた出来事を分析する。二点目は進路選択の過程において受けた支援について分析を行い、キャリアデザイン学部独自の支援システムであるキャリアアドバイザー制度の質的向上への示唆を得る。以上二点である。

2. 方法

(1) 対象者

法政大学キャリアデザイン学部学生11名（男性6名、女性5名）。対象者は、全員が卒業後の進路が決定した4年生である。対象者全員が企業への就職を予定しており、内定先の業界は、学校法人と金融がそれぞれ3名、情報通信、不動産、旅行、人材サービス、ベンチャーが各1名であった。筆者の人的ネットワークを通じて、調査への協力を依頼した。

(2) 時期

2012年10月から11月。対象者の都合のよい日時を選んで実施した。

(3) 手続き・方法

まず、あらかじめ用意した質問内容に回答してもらい、加えて、学生が自由に話すことができるような半構造化面接を行った。平均面接時間は約80分であった。面接に際しては事前に面接依頼書にて目的、概要、所要時間を説明した上で了承を得た。面接場所は、法政大学キャリアデザイン学部キャリア相談ルーム。記録するために、対象者が話した内容を記録用紙に記入するとともに、ICレコーダーを用いて音声を録音することを面接に先立ち説明して了解を得た。

(4) 質問項目

進路決定過程における意識や行動の変化を検証するために、学生が自らの進路選択を振り返ることができる設問とした。学生は回答にあたり、筆者の質問に対して自由に話をするため、質問の②、③、④は複数回答を可とした。なお、質問項目作成にあたり、ベネッセ教育研究開発センターが行った「平成17年度経済産業省委託調査 進路選択に関する振返り調査—大学生を対象として—」⁽⁴⁾を参考に一部改変して使用した。質問項目は以下の通りである。

①内定先

②進路選択に影響を与えた出来事

就職活動にこだわらず、進路選択全般に関する質問を行った。

③進路選択過程で学生が受けた支援

進路選択において、学生が相談した相手と活用した資源について質問を行った。

- ・進路を選択するときに相談をした相手
- ・就職活動中に必要とした支援
- ・就職活動で活用した支援
- ・就職活動時に活用したかったが、実際には活用できなかった支援

- ④法政大学キャリアデザイン学部キャリアアドバイザー制度について
学部独自のキャリア支援制度について質問を行った。
・進路選択や就職活動時のキャリアアドバイザー利用状況

3. 結果

面接記録用紙と、録音された音声データに基づいて、2. (4) に示した質問に対する面接結果を、調査対象者の発言内容を表にまとめた。その内容から、キーワードを分類し、図にまとめた。学生の進路決定過程における意識や行動の変化が示されていると考えられる語りはそのまま引用する。

結果について、第一に、進路選択における影響（出来事、相談相手、活用した支援）を検討する。第二に、法政大学キャリアデザイン学部独自の支援制度であるキャリアアドバイザーの支援を検討する。

（1）進路選択における影響（出来事、相談相手、活用した支援）

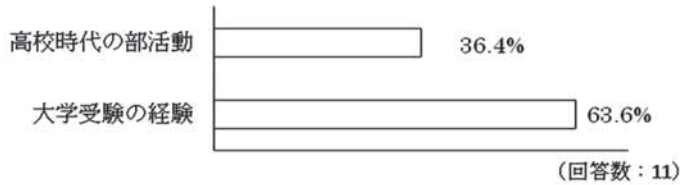
①進路選択に影響を与えた出来事

進路選択に影響を与えた出来事について、大学入学以前と大学生活、そして就職活動についてそれぞれを図1、図2、図3に示した。進路選択に影響を与えた要因に関しては、大学入学以前では、高校時代の部活動（36.4%）と大学受験の経験（63.6%）が挙げられた（図1）。なお、大学受験の過程は一般受験、センター試験、学校推薦、付属高校からの進学など複数の受験方式があることから、面接で語られた内容はそれに応じてさまざまであった。大学生活では、ゼミ活動が最も多く（35.7%）、次に授業（21.4%）、サークル活動（14.3%）が挙げられた。また、オープンキャンパススタッフ⁽⁵⁾、ボランティア、インターンシップ、アルバイト等の回答数はそれぞれ7.1%であった（図2）。就職活動では、選考過程（書類選考、面接）が最も多く（45.5%）、選考過程での不合格（27.3%）、2社以上の内定獲得（18.2%）、就職活動対策講座参加（9.1%）が挙げられた（図3）。

大学入学以前についてみると、大学受験の経験は、大学進学者全員が体験することであり、対象者の半数以上（63.6%）が挙げたと考える。一般受験をした学生は、「なかなか成績が上がらず辛かったが、自分は勉強をしているのだ

から大丈夫だと自信を持つようにしていた」と大学受験プロセス全体を通して、自らの努力とそこから得た自信が語られた。学部を決定する最終段階で理系から文系に変更せざるを得なかった学生は、希望する学部への進学が叶わなかった心境と、新たに進学を決意した学部への不安や葛藤を語った。また、第一希望の大学が不合格となり、別の大学に進学を決めたことも挙げられた。本当は「浪人してでも希望大学に行きたかった」と考えていた学生は、進路選択を妥協したように感じて、入学後しばらくの期間は大学生活を心から楽しむことができなかったようである。大学入学後にあらためて受験勉強を再開した学生は、大学1年の授業を履修しながら再度大学受験をする準備を進めていた。努力の結果、希望する大学に合格することができて自信につながった。大学受験の経験は、どのような受験方式を選んだとしても、文系・理系の選択、年間を通した学習計画、大学や学部・学科選び、受験勉強と普段の学生生活の過ごし方のバランスをとることなど、多様な経験である。こうした受験を通して経験したことが、大学入学後の意識や大学生活の過ごし方、就職活動に対する意識や行動に影響を与えていると考える。

図1 進路選択に影響を与えた出来事（大学入学以前）

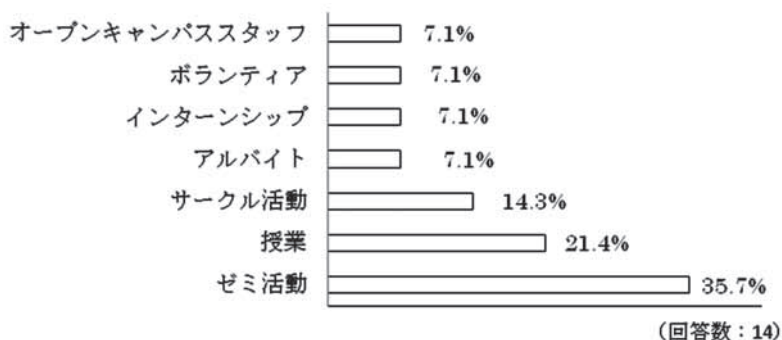


大学生活では、進路選択に影響を与えた出来事にゼミ活動を挙げる学生が最も多かった。専攻する専門分野について教員から指導を受けたことに加えて、ゼミ活動での役割や仕事、ゼミでの人間関係など、ゼミ活動における日常的な出来事が、進路選択に影響を与えたことが挙げられた。面接をした学生全員がゼミに所属しているためとも考えられるが、大学3年生から始まる2年間のゼミ活動は、専門分野の学びと研究を基盤としたゼミ生同士のディスカッションや企業との産学連携、研究発表など多岐にわたる実践的な経験の場である。それら経験が、進路を選択する際の考え方を養い、就職活動時の行動力へとつな

238 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

がっていると考える。なお、回答数は少なかったがオープンキャンパススタッフ、ボランティア、インターンシップ、アルバイトについてみると、他者と関わったことで得た“気づき”が語られている。オープンキャンパススタッフは「高校生の相談相手となった経験が、相手の人生に密着するような仕事への興味となった」、ボランティアでは「周りから心配されても、なんとかすると引き受けた仕事だったが、やり遂げることができなかった」、インターンシップでは「半社会人を経験して、社会人との能力の格差を実感し、自分の能力の無さを実感した」、アルバイトでは「労働者として、学んだことが多い。社会人とのつき合いは社会勉強となった」などである。小杉（2007）が指摘するように、学生が学生生活の諸活動を通して鍛練されたことが、自らの人柄や個性を形成していることが示唆される。

図2 進路選択に影響を与えた出来事（大学生生活）



就職活動では、進路選択に影響を与えた出来事に選考過程（書類選考、面接）を挙げる学生が多かった。選考過程でうまくいった経験（例えば、面接で実力を発揮できていると感じた）よりも、うまくいかなかった経験が多く語られた。具体的には、面接時の話し方や態度について面接担当者に怒られた、緊張し過ぎて頭が真っ白になり自分の考えを話すことができなかった、準備不足のため、十分な自己アピールができなかったなどである。選考過程で不合格となったことが挙げられていることと合わせて考えると、学生にとってネガティブな経験が進路選択に影響を与えていることがわかる。すなわち、その時点ではう

まくいかなかったけれども、同じ失敗を繰り返すことなく、再び悔しい思いをしないためにはどうすればよいかと、学生が自分自身の行動を振り返り、その後の対策について考えたことが、意識や行動に変化を及ぼしたと考える。

図3 進路選択に影響を与えた出来事（就職活動）



②進路選択における支援

進路選択における支援について整理し、進路を選択するときに誰かに相談をしたかを図4に示した。また、相談をした学生が誰に相談をしたのかを図5に示した。図4より、81.8%の学生が進路を選択するときに誰かに相談をしている。相談相手の内訳は、ゼミの教員（29.4%）、親以外の年長者（29.4%）への相談が多く、友人（11.8%）、親（11.8%）、キャリアセンター⁽⁶⁾（11.8%）と続き、先輩（5.9%）が最も少ない。

ゼミの教員については、前述の進路選択に影響を与えた出来事（大学生活）で「ゼミ活動」が挙げられていることから、進路選択時の相談相手としてゼミの教員が選ばれていることと合致する。親以外の年長者を挙げた学生は、「同

図4 進路を選択するときに誰かに相談をしたか（回答数11）

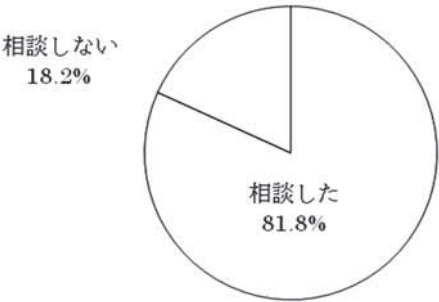
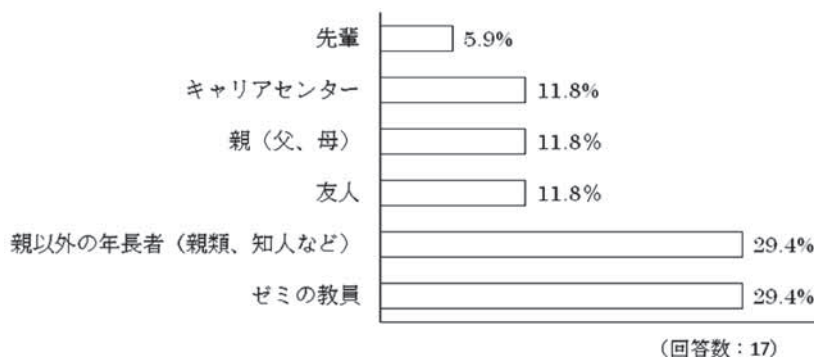


図5 進路を選択するときに相談をした相手



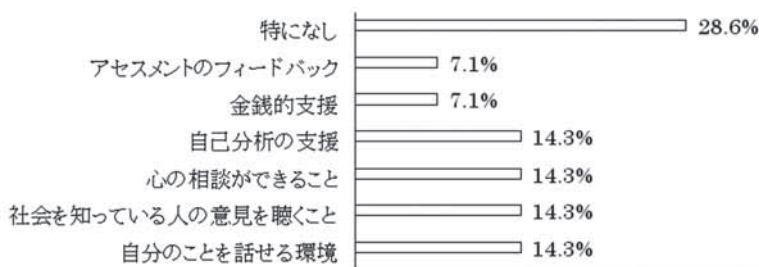
じ世代には進路選択の相談はしなかった」、「働くひとの話を聞くことで色々な考え方があることを知り、選択肢が増えた」と語っている。学生は、職業経験が豊富な年長者と関わることで、同年代との関わりの中では得ることができない考え方や、ものの見方を得ることができると自覚していると考えられる。ただし、学生にとって年長者である親(父、母)については、相談相手として意見が分かれた。親に相談をした学生は何れも女性であり、相談相手は主として母親である。進路選択に限らず、日頃から大学生活全般について母親との会話がが多く、進路選択についても日常的な会話のなかで行われていたと考える。一方で、親を相談相手として選ばなかった学生は、「理解してもらえない」、「親には言えない」、「結果報告のみで相談はしない」と語った。学生にとって、親との日常的な会話と進路選択に関する相談では、学生自身が話したいことや、親に聞いてもらいたいこと、親から受けたいアドバイスが異なっていると考ええる。なお、誰にも相談をしなかったと語る学生については、アルバイトやサークル活動などで活発な活動をしていることを確認している。このような学生にとっては、アルバイトやサークル活動などの日常的な活動のなかで関わる人たちが、事実上の相談相手としての機能を果たしていたのではないかと推測する。

③就職活動における支援

進路選択における支援のなかで、就職活動での支援について整理し、学生が就職活動中に必要とした支援を図6に示した。また、学生が就職活動で実際に活用した支援を図7に示した。さらに、学生が就職活動で活用したかったが、

実際には活用できなかった支援を図8に示した。まず、図6より、4名の学生は就職活動中に必要な支援は「特になし」としている。それ以外の学生については、自己分析の支援（14.3%）、心の相談（14.3%）、社会を知っている人の意見を聴くこと（14.3%）、自分のことを話せる環境（14.3%）、アセスメントのフィードバック（7.1%）、金銭的支援（7.1%）を挙げた。社会を知っている人の意見を聴くことについては、前述の進路選択における支援（相談をした相手）において、ゼミの教員や親以外の年長者が挙げられた結果と合致する。次に、自分のことを話せる環境については、具体的な発言としては、「普段は自分で考えて答えを出すタイプだが、就職活動では誰かに相談したり、話をした方が良い」、「気軽に話ができる環境がよい」、「話を聞いてもらえるだけでうれしい」などが確認できた。また、心の相談については、「就職活動時は、これまでに経験したことがないほど悩んでいた」、「漠然とした不安を断ち切って欲しかった」、「キャリアセンターを活用していたが、そこは心の相談をするところではない」と語られた。一方で、就職活動中に必要な支援は「特になし」とした4名全員が、日頃からいろいろな人と関わり、話をしてきたことが、結果として就職活動に役立ったと確認できた。学生の語りから、就職活動時に自らの考え（例えば、業界の選び方）や感情（喜び、不安、心配など）を話したい、聞いて欲しいということが読み取れる。

図6 就職活動中に必要とした支援



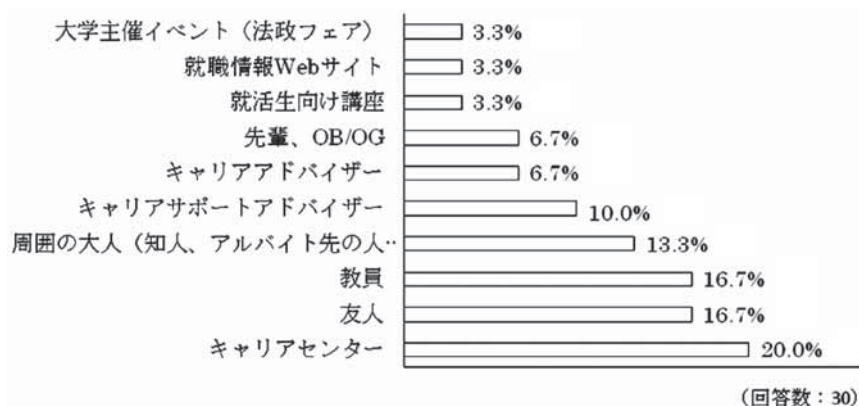
(回答数：14)

次に、学生が就職活動で実際に活用した支援（図7）は、キャリアセンターが最も多く（20.0%）、教員（16.7%）、友人（16.7%）、周囲の大人（13.3%）、キャ

242 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

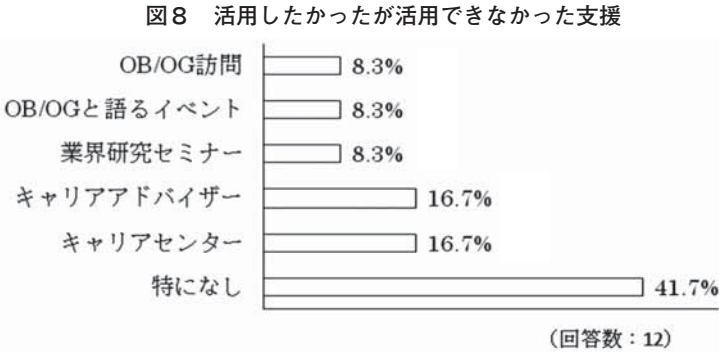
リアサポートアドバイザー⁽⁷⁾(10.0%)、キャリアアドバイザー(6.7%)、先輩(6.7%)と続く。就職情報 Web サイト、大学主催イベント、就活生向け講座の回答数は各3.3%であった。キャリアセンターは大学内に設置された就職支援組織であり、求人情報の提供や学内企業説明会の開催、応募書類の添削や面接指導などを行っている。就職活動においてキャリアセンターを活用した学生は、「キャリアセンターが主催する就活支援講座はほとんど参加した」、「応募書類を添削してもらったとき、最初は怒られるのではないかと不安だったが、ほめられてうれしかった」、「具体的なアドバイスが役立った」、「相談する担当者を毎回変えて、いろいろな意見を聞くようにしていた」としており、キャリアセンターの機能と合致する。教員、周囲の大人、キャリアサポートアドバイザー、キャリアアドバイザー、先輩は、前項で述べた職業経験が豊富な年長者に該当しており、学生は関わることで得られるメリットを理解したうえで、就職活動で活用したと考える。

図7 就職活動で活用した支援



最後に、学生が就職活動で活用したかったが、実際には活用できなかった支援(図8)は、「特になし」が最も多く(41.7%)、キャリアセンター(16.7%)、キャリアアドバイザー(16.7%)、業界研究セミナー(8.3%)、OB/OGと語るイベント(8.3%)、OB/OG訪問(8.3%)となった。「特になし」とした学生は、就職活動において学内外の資源を効果的に活用したと確認できた。キャリアセ

ンターについては、「キャリアセンターの情報は利用したが、個別相談は利用しなかった」、「キャリアセンターは行きづらい雰囲気だった」と語られた。前述したキャリアセンターの利用状況と合わせると、より多くの学生がキャリアセンターを活用するための方策が必要だと考える。ただし、本研究は、学生に自由に語ってもらう半構造化面接方式であり、キャリアセンターが行う就職活動時の支援を明らかにする質問項目を設けていなかったため、十分な解釈が難しかった。さらなる検討を必要とする。



(2) 法政大学キャリアデザイン学部独自の支援制度であるキャリアアドバイザーの支援

本研究の対象者である学生（11名）は、全員がキャリアアドバイザーと面識があるので、学生がキャリアアドバイザーと面識を持ったきっかけを図9に示した。次に、学生が進路選択時や就職活動時における、キャリアアドバイザーの活用状況を図10に示した。学生がキャリアアドバイザーと知り合うきっかけは、授業やイベント⁽⁸⁾であり、授業がイベントよりも多かった（図9）。キャリアアドバイザーが主催するイベントよりも、授業がキャリアアドバイザーの存在を知るきっかけとなることが示された。次に、キャリアアドバイザーの活用状況は、活用した学生が18.2%であり、活用していない学生は81.8%であった（図10）。活用した学生は、「キャリアアドバイザーに自分の言いたいことを言えて、スッキリした」、「キャリアアドバイザーから問いかけてもらったことがうれしかった」と語った。一方で、活用していない学生は、具体的な発言と

244 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

しては、「キャリアアドバイザーと話をしたかったが就職活動中は忙しくて訪ねる余裕がなかった」、「キャリアアドバイザーの存在は知っているが、就職活動には必要なかった」、「雑談なら自然に話ができるが、わざわざ相談に行くことはしなかった」、「就職活動のときは行かなかった。もっと会う機会が増えれば、気軽に行ったと思う」などが確認できた。学生はキャリアアドバイザーと面識があり、授業やイベントで会話をする機会を通してラポールが築かれていた。しかし、本研究の結果では、学生とキャリアアドバイザーの関係と、進路選択時や就職活動時の活用状況に相関性を確認することはできなかった。ただし、前項でも述べたが、本研究は、学生に自由に語ってもらう半構造化面接方式であり、キャリアアドバイザーが行う進路選択時や就職活動時の支援を明らかにする質問項目を設けていなかったため、十分な解釈が難しかった。さらなる検討を必要とする。

図9 キャリアアドバイザーと知り合ったきっかけ（回答数：11）

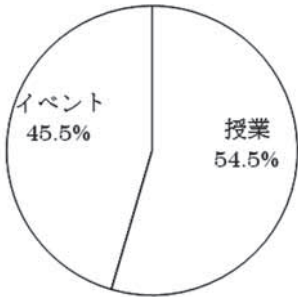
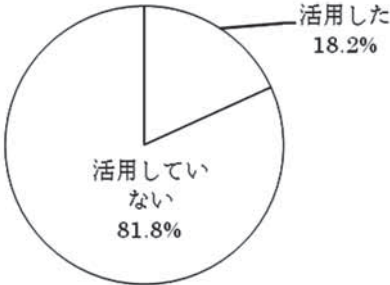


図10 キャリアアドバイザーの活用状況（回答数：11）



4. 考察とまとめ

本研究の目的は、進路決定過程における学生の意識や行動の変化、進路決定者が受けた支援、キャリアアドバイザーの支援を検討することであった。

学生の意識や行動の変化をもたらした出来事を具体的に検討するために、大学入学以前と大学生活、そして就職活動について考察をした。大学入学以前では大学受験時の経験を挙げた学生が多く、なかでも、大学受験プロセス全体を通して影響を受けたと語る学生が多かった。希望する大学に合格した達成感や、思うような結果を得ることができなかった挫折感など、学生が語る経験は多様である。この経験が大学入学後にも少なからず影響を及ぼしているようである。大学生活においても、特定の出来事を挙げる学生よりも、2年間にわたるゼミ活動を通して経験したことを語る学生が多かった。専門分野の学びにこだわらず、ゼミ生同士の人間関係や集団のなかで発揮されるリーダーシップなど多様な経験が語られた。ゼミ活動で他者と関わる経験が、学生の意識や行動の変化につながっていると考える。さらに、就職活動については、ネガティブな経験から影響を受けたことが語られた。学生の「自分の弱みを言われ続けているように感じて辛かった」、「何をやってもダメだと思った」という語りからは、就職活動の選考過程でうまくいかなかったと感じた時点では、辛さや悔しさを味わう経験であったことが想像できる。しかし、時間の経過とともに、「将来の人生をちゃんと考えるのが就活だと思えた」とも語っており、自らが経験したことを将来の進路選択につながる“意味のあるもの”としてあらためて捉えなおしたと考えられる。すなわち、学生が影響を受けたと考える出来事とは、進路選択に係る一連の出来事であり、突発的な出来事や、一過性の出来事ではないことが明らかになった。

学生が受けた支援をみると、大学内外において相談相手が存在し、何らかの支援を受けている。なかでも、ゼミの教員や親以外の年長者などとの関わりが、学生の進路選択や就職活動に影響を及ぼしていることが示された。学生は、進路決定過程のなかで、自らが経験したことを、将来の進路選択につながる“意味のあるもの”として捉え直し、それが行動の動機となっている。そして、意識や行動の変化は、大学内外における相談相手を通して得られる経験によるところが大きい。このプロセスのなかで、社会経験が豊かな年長者の存在は、学

246 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

生にとって相談相手であるとともに、自らの将来を描くためのロールモデルになっていると考えられる。

法政大学キャリアデザイン学部独自の制度であるキャリアアドバイザーについては、学生がキャリアアドバイザーに抱く印象として、「気軽に話を聞いてもらえるのはありがたい」と語るように総じて好意的である。また、学生がキャリアアドバイザーのもとを頻繁に訪れないとしても、キャリアアドバイザーを「いざとなれば頼れる存在」と認識している。これはキャリアアドバイザーと学生の信頼関係に基づくものであろう。とは言え、学生の進路決定過程におけるキャリアアドバイザーの活用状況をみると、積極的に活用している学生は少ない。キャリアアドバイザーが学生の進路選択に役立つ存在となるためには、さらなる検討が必要である。そこで、学生とキャリアアドバイザーの間で築かれている良好な関係を活かし、キャリアアドバイザーが学生の進路決定過程を支えるパートナーとなることが望ましいのではないだろうか。例えば、2010年から始まった体験型選択必修科目「キャリア体験学習」の授業支援は、年間を通して学生と関わるため、より多くの学生と信頼関係を築ききっかけとして活用できる。具体的には、日常的に顔を合わせる機会が増えることで、学生がキャリアアドバイザーの人物や専門性を知り、相談に行きやすい下地をつくることができる。つまり、キャリアアドバイザーが大きな問題が生じた時に相談する相手ではなく、大学生生活の日常的なアドバイスから進路選択の相談まで活用できる身近なリソースであることを学生に周知することが必要であろう。

また、授業以外においては、ゼミを担当する教員にキャリアアドバイザーの支援体制を理解してもらうことが必要であろう。ゼミは専門性と社会性を培う場であり、学生がゼミを通して身につける能力は、主体性やコミュニケーション能力、行動力など幅広い能力である。学生がこれらの能力を就職活動や卒業後の実社会で発揮するために、ゼミを担当する教員と連携を図り、キャリアアドバイザーが社会とのパイプ役として機能することも考えられる。例えば、ゼミの専門性に合わせた内容で学生の自己理解を促すワークショップを行うなど、キャリアアドバイザーが柔軟な支援をすることも必要である。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、非常に限られた11名を対象にしたものである。また、学生への支援については、本学の学生と本学のキャリアアドバイザーの関係を前提としており、様々な大学を含めた学生へ一般化するには慎重を要する。本研究の限界は、数字をパーセント表示しているだけであり、傾向値として扱っているにすぎない。今後は、調査対象を拡げることや、質的調査と量的調査を組み合わせることで、学生の進路決定過程における意識や行動の変化、さらに心理的变化を明らかにすることが可能となるであろう。

おわりに

今回、協力を依頼した学生は、面接を通してあらためて大学生活を振り返り、卒業後の進路について新たな意味づけをしていた。その根拠となる学生の語りの一例を挙げると、「そのときは辛いと思ったけれども、今思えば、ありがたいと思える」、「これまではなんでも自分でやっていたが、人を頼っても良いのだと思えるようになった」、「等身大の自分を受入られるようになった」、「これでよかったのかはわからない。正解があるかわからないけど、働かないとわからないけど、与えられたところで頑張る」などである。今回の面接を、学生が自らの経験を語る自己開示とすると、榎本（1997）が指摘するように、語ることで、重大な決断に必要な新たな洞察を得たり、心の中に充満した情動を解放したと考えることができる。すなわち、学生にとって、進路選択の経験を自己開示することは、内的キャリアの発達につながると考える。今後の課題として、学生の自己開示と内的キャリアの発達関係を明らかにして、進路決定過程における意識や行動の変化を検討することも必要である。

謝辞

本研究に調査を実施するにあたり、調査に回答してくださった学生のみなさまに、心より御礼申し上げます。また、本稿のご指導賜りました宮城まり子先生、原恵子さんにあらためて感謝申し上げます。

[注]

- (1) 外的キャリアが仕事の役割・権限・責任などで表現される外的世界であるのに対して、内的キャリアは仕事の自分にとっての価値・意味・意義を自ら問う内的世界である。内的キャリアについて、宮城（2002）は、自分の人生に対する価値観、生き方の価値を何に置くかが重要であることを述べたうえで、内的キャリアは心理的満足を与えるキャリアとしている。小野田（2004）は、仕事あるいは人生の質をどのような価値観で捉えるかは、どう生きるのかに関わることであったうえで、自己理解が深まるにつれて内的キャリアについての自己認識が深まると述べている。
- (2) 法政大学キャリアセンター学部別就職状況 キャリアデザイン学部
<http://www.hosei.ac.jp/careercenter/riyo/syushoku/jhokyo/careerdesign.html>（2012年12月25日閲覧）
- (3) 法政大学でキャリアアドバイザー制度を採用しているのは、キャリアデザイン学部のみである。2012年度は筆者を含め3名がその職に就いている。身分は嘱託職員である。なお、本学のキャリアセンターにおいても、同名称「キャリアアドバイザー」がいるが、キャリアデザイン学部のキャリアアドバイザーは、求人票の受付や就職先を紹介する業務を行わない。キャリアアドバイザー制度の概要およびキャリアアドバイザーの業務概要は、服部典子（2012）法政大学キャリアデザイン学部紀要第9号 p.331～p.349に詳しい。
- (4) ベネッセ教育研究開発センター 平成17年度経済産業省委託調査 進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として—
<http://benesse.jp/berd/center/open/report/shinrosentakku/2005/index.html>（2012年12月25日閲覧）
- (5) オープンキャンパスは、法政大学が主催する、高校生を対象とした入試イベントである。学部学科説明会、模擬授業、学生企画などさまざまなプログラムがあり、オープンキャンパススタッフが主体的に企画・運営を行っ

ている。

- (6) 法政大学キャリアセンターは、2005年4月に設立された。入学後の1年生から4年生までの幅広いキャリア開発支援、就職に向けての支援（就職セミナーの開催、就職情報の提供、個別の相談など）を行っている。
- (7) キャリアサポートアドバイザーは、法政大学キャリアデザイン学部の実験型選択必修科目「キャリアサポート実習」の授業支援を行っている。
- (8) キャリアアドバイザーは、2010年度より、法政大学キャリアデザイン学部の実験型選択必修科目「キャリア体験学習」の授業支援を行っている。キャリアアドバイザーが主催するイベントとは、履修相談会や就職活動支援（例えば、模擬面接会など）である。イベントについては、服部典子（2012）法政大学キャリアデザイン学部紀要第9号 p.335に詳しい。

[引用文献]

- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 小野田博之 2004 キャリア開発を支える環境 横山哲夫（編）キャリア開発／キャリア・カウンセリング 生産性出版 pp.108-111
- 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃（編）1996 心理学第4版 東京大学出版会
- 金井壽宏 2002 働くひとのためのキャリア・デザイン PHP 研究所
- 小杉礼子（編）2007 大学生の就職とキャリア「普通」の就活・個別の支援 勁草書房
- 宮城まり子 2002 キャリアカウンセリング 駿河台出版社
- 無藤隆・岡本祐子・大坪治彦（編）2004 よくわかる発達心理学 ミネルヴァ書房
- 渡辺三枝子 2002 新版カウンセリング心理学カウンセラーの専門性と責任性 ナカニシヤ出版

ABSTRACT

Study of students' minds and acts in their course setting processes - including a suggestion about the role and function of career advisors at Hosei university.

Noriko HATTORI

University students go through a variety of experience in their school life, such as club activities, part-time jobs, volunteer activities, or internships as well as academic works. Setting the course after university is one of the most important experiences for the students, since it gives them an opportunity to acquire motivation for making the plan after university, and to learn how to get rid of ambivalence and anxieties.

Some students decide to get a job with a company, while some others decide to go on to graduate school. In any case, they decide their courses after university, finding their interests and advantages, by receiving supports from other people. In the course setting processes, students can improve self-awareness and figure out their senses of value, accumulating a rich variety of experience. Therefore the course setting process is very important.

There are two major purposes of this study. One is to clear up the change of students' minds and acts in their course setting processes, by analyzing the events that affect students' minds and acts. And the other is to obtain hints to improve the career advisor system, which is unique to Hosei university's faculty of life-long learning and career studies, by analyzing the supports received in students' course setting processes.